



第22号

玉貫山 長光寺

〒169-0073

東京都新宿区百人町1-5-2

TEL:03-3209-5360

FAX:03-3200-7026

<http://www.chokoji.net/>

坐禅堂の文殊菩薩像

悠久の摂理

任職 松倉 大鏡

平成二十二年秋に研修のため山形県の鳥海山の麓にある永泉寺という寺に行きました。私達が寺に到着して、なにげなく門前の川に目を向けると、そこには痛々しい傷ついた何匹もの鮭がおりました。一万数千キロともいえる長旅を終え、母川回帰した鮭達でした。

鮭達は約四年前の晩秋、川の上流で孵化し、翌春わずか五センチにも満たない身体を流れに任せて湾に下り、さらに外洋からベーリング海、アラスカ湾を季節ごとに回遊して子孫を残すために母なる生まれた川に帰ってきたのでした。私はしばしばボロボロになった鮭に目をこらしました。河口から目的の地までの遡上は数々の障害や危険を乗り越えなければならぬ命がけの旅だったのでしよう。本能と嗅覚とを頼りに目的の清流に辿り着いた雌鮭は雄鮭に護られながら、既にすり減りボロボロになった尾と鰭を駆使して川底に産卵するための床を造り放卵・放精するといえます。そして最後の力を振り絞ってその卵床を砂利で隠し、生涯の使命完遂の時を迎えるのです。間もなく迎える死の時まで母鮭は、卵床の周囲を巡って我が子の命の芽を護り、ついに骸となります。その寸前の姿が目の前にいるのです。なんだか役目をすべて終えた安らぎが見て取れました。この鮭達はやがて骸となって森の猛禽類を養い、微生物に分解され、森と川と海を肥やし稚魚達を育みます。これが、悠久の摂理に生死する鮭の一生です。

鮭は遙か昔から、その身に具わる特性に素直に寄りそって鮭らしく生きていくといえます。むしろ人間にも独自の特性が具わっています。が、ともすれば人はその特性を誤用するために人間らしさを歪めることになってしまうのです。

それでは誤用されがちな人間の特性とはどのようなことでしょうか。それは私達の「自己」の仕組みと働きに見られるものです。鮭だけでなく生きとし生けるもの全てに「自己」があります。鮭は極めてシンプルであるのに対し人間はとても複雑なために誤用しがちであると思います。



人間の「自己」には四つあるといいます。

一つめは身体の自己、免疫ともいいます。免疫は昼夜を分かたず私たちの身体を人間らしく護っています。

二つめは本性の自己。これは生物すべてにあり、原始的性癖、本能とも言えます。

三つめは理性の自己。これは本能の自己とは対峙する関係にあり、また、先天的に具わっているものでなく、躰や教育によつて発育するものです。

四つめは三つめ自己を統括管理する自己。人が「私」と認識しているのはこの自己です。この「自己」が肝心の自己なのです。時に本能の暴走を制御し、溢れるエネルギーを転換して理性を育て、その質を高めなければなりません。

人間らしく生きることが、自己の主人公たる第四の自己を油断なく正しく機能することに他なりません。そのための教えが仏教であると存じます。

『無門関』という語録に「瑞巖主人公」という話があります。この和尚は毎日自分を主人公と呼んで、自ら答え「ぼんやりするな」「他人からだまされるな」と自警したと言われます。私達もこの先人のように自らを統治する呼びかけを忘れてはならないと存じます。



遡上する鮭

臘八摂心に参加して

松倉 まり子

十二月八日は成道会です。お釈迦様がお悟りを開かれた日になります。毎年長光寺では、通常の坐禅会の他に臘八摂心といって一般の参禅者の方と十二月一日から七日まで夜の坐禅をしております。私も毎年参加しております。坐禅の始まる合図に鐘の音が三つ坐禅堂内に響き渡ります。みんな背筋を伸ばし緊張した空気の中、しばらく坐っていると住職の口宣が始まります。口宣とは坐禅中に行う短い法話のことです。昨夜のお話は、次のような内容でした。

「地球は一秒間に30キロメートルの速さで太陽の周りを回っております。私は超高速で動く地球という乗り物に乗っていながら、落ちる心配もなく、その速さを感じることもなく安心して過ごす事ができます。それは、大慈悲という船に乗っているからであります。天地宇宙と一体となり、その大慈悲によつて生かされていることに気付くのが坐禅であります。目で見たり、耳で聞いたり、感じたりすることはできないけれど本当はある、そういうことは、世の中には沢山あります。」

お話はまだ続きませんが、その法話を聴きながら、ふと思いました。仏様や観音様は私達の目で見ることができるよう仏像として存在しているらしやいます。でも、本当は大宇宙であり大自然であり一輪の花であり、あるいは、今日出会った人であったりと、いつでも姿を変えて、私たちを導いてくださいます。これも目に見えなくても本当はある仏様のお姿であり、大慈悲の中に生かされているということに気付きました。本来は坐禅中にこんなことを考えるのも雑念なのでいけないのです。すぐに心をリセットして姿勢と呼吸だけに集中するように心掛けます。みなさんも、ちよつと坐禅に興味を持っていただけましたでしょうか。お寺って、お葬式や法事やお墓参りはもちろんですが坐禅、お写経、御詠歌とお釈迦様の教えを学びたい方のためにつでも門を開いています。仏様の教えは、大きくて広くて有り難い大慈悲の教えなのです。そして自分だけでなく自分とともに生きるこの世のすべての人の幸せをみなさんと一緒に願い、精進してまいりたいと思います。

長光寺の歴史

戦災による伽藍焼失については前回の号で述べました。戦後の長光寺は先代住職の戦地より復員から始まります。八王子方面へ疎開していた本尊様や過去帳、そして寺の家族が百人町に戻るには少し時間が必要でした。寺の建物が無ければ仏様の安置もできません。でも建築資材が不足しているその当時にあつては、仮本堂を建設することは大変なことであつたことでしょう。そのため、しばらく疎開地にて生活をして、住職が用事の時だけ百人町の寺の跡地に通っていたようでした。

幸いにも先代の奥様から時々茶飲み話で、この当時のお話を聞き、疎開地で食糧が乏しかったことを聞くことができましたが、東京で生まれて地方の生活を知らない奥様は、馴れない寒い地方で難儀な生活を余儀なくされました。しかし、それは東京に在住したすべての人が同じ苦しみを経験したことでした。お檀家の皆様も戦後の復興については、同様な思いを持たれたことと存じます。

戦後の新宿の復興が始まる頃、ようやく長光寺でも仮本堂と庫裡の建物が仕上がるのを機に、疎開地より戻った住職や家族は戦後の復興の中で寺を護ってくださいました。戦災は建物だけでなく墓地にも惨禍を残しました。空襲による火災によって墓石が相当数傷み、中には空襲によって家族が全員亡くなるとう

う痛ましいこともありました。日本の歴史にとつても未曾有の出来事であり、大変な苦難の日々でありました。

朝鮮動乱をきっかけとして、戦後の右肩上がりの経済成長がなされ、東京五輪後の新宿はにぎやかな街になってきました。お檀家の皆さんも落ち着きを取り戻しましたが、長光寺はそのままの佇まいでした。先代の住職の体調がすぐれず横臥の日々が続きまして。そしてついに昭和六十一年に遷化(死去)されました。

後任者が不在のため、宗派の規定により兼務住職が就任されました。山梨県東光寺住職の大塚雄参師です。幸いにも寺の維持に尽力され、高い見識をもって法灯を点していただきました。

そして十年余の間、寺を護って下さったのは先代住職夫人でした。物騒な新宿で女性の独り暮らしでした。幾重にも鍵を閉めて暮らし、万が一の時は隣地に逃げる事ができるようにと木戸を設け、慎重に独りで寺を維持して下さいました。老いた身体にもめげず、皆さんにはにこやかに対応し、自分に厳しく、他に寛大な方で気品のある方でした。気丈な気持ちで寺を護ってくださいましたが、平成十年に病魔の侵すこととなり、平成九年に新住職の就任を見届け、静かに逝去されました。

「住職は本山の修行をした資格のある人に」という信念を曲げずに終始して、親族の情に

も流されず筋を通した方でした。この方の存在は忘れてはならないことです。

「本年『長光寺の歴史』として小冊子を発刊いたします。創建当時から今日に至るまでの歴史資料をどれだけ網羅できるか判りませんが、代々法灯を継承していただいた先人への、ささやかな報恩となれば幸いです」



戦後から平成十二年までの長光寺本堂

施食会のお知らせ

来年もまた五月二十三日に施食会を行います。一年に一度のご先祖様の供養なので、どうぞ奮ってご参加下さいますようお願い申し上げます。

墓地管理料について

墓地管理料なのですが、同じ名字の方が多いため、今後はフルネームを書いていただけるようお願い申し上げます。お手間をかけて大変申し訳ありませんが、どうぞよろしくお願い致します。



長光寺の年間行事(平成二十九年)

一月一日〜三日	大般若祈禱
二月十五日	涅槃会
三月	春の彼岸会
四月六日	花まつり
春予定	坂東観音巡礼
五月二十三日	施食会
七月	盂蘭盆会
九月	秋の彼岸会
秋予定	坂東観音巡礼
十二月一日〜八日	臘八捋心
八日	成道会

その他月行事として第一、第三土曜日に経験者様向け坐禅会。第二土曜日に初心者様向けの坐禅会を、どちらも十四時から行っております。初心者様向け坐禅会にしましては予約が必要となります。また梅花講を第二、第四月曜日(変更あり)に行っております。詳しくはホームページをご覧ください。

年間行事、月行事、どなたでも参加できます。是非体験してみして下さい。

編集後記

◆これからの長光寺

今年もまた一年が終わろうとしています。昨年の編集後記でこれからの長光寺はどこへ向かっていくのかという問題を考えました。本年度はそれを模索する年だったような気がします。

今年色々新しいことを始めた際、褒められることもあれば、怒られることもありました。辛いことも多くあったような気がします。しかしその経験が自分の肉や骨となり、自分の身につき成長し、ゆくゆくは長光寺のためになるのだと思いました。

お寺離れが進む昨今、今までのやり方ではお寺離れが余計に進むばかりです。長光寺のためにこれからも多くの経験を積み、精進していきたいと思えます

(徳允記)